



特54

55

真久樂雙誌

定期刊行

第貳號

東京圖書館			
和書門	小說類	函架	別四架
			一〇二號
			四冊

中古美談

○上杉謙信の信玄逝去の事殊の外隠密ゆゑ知ざりし北條氏政使者を以て告知し其時謙信の春日山小居れ湯漬を食せられしが此事を聞と其儘箸を捨口の食を吐出し扱々残り多き大将を死したるもの哉英雄人傑の信玄をこる云なら先關東の弓矢摧たりとて落涙したりしとぞ

平々誠お以て實以て恐縮の次第と申その第一号發兌の際職工過つて太閤記の挿畫を前後に入れ本成て始めく心附何やせん斯やせんと猶豫うち發兌の期に遅んことを恐れ其儘賣出しましたが其内必らずさし換て進呈ますれば暫時の處お見悪くハ得とも何卒御勘弁の程願ひ奉ります附ての當号より日蓮記の一書を省き太閤記太平記を一枚づゝ相増且又表紙裏へ一席の茶話お中古の極面白美談を記載て覽覽お呈ます

次号目錄

- 太閤記 平手政秀諫死より藤吉郎信長卿に仕ふに至る
太平記 資朝後基關東下向付告文の事南都北嶺行幸の事
源平盛衰記 詔して二代の皇后立 會我物語 祐茂母の遺言を祐經お告ぐ話 小松殿祐親祐經等を召る話
定價 一冊金五錢〇十冊前金四十五錢〇二十冊前金八十五錢府外遞送の郵税一冊一錢の割を以て申受ひ且郵便局無之地の二冊又付一錢宛の増税ヲ受ひ事
明治十五年五月二十九日出版御届 毎月二回出版
編輯出版人 東京府平民 清水市 次郎
大賣 剗 元大坂町十一番地 法木 徳兵衛

けるが召伴たる下僕病臥して立事あたはず此故日備の人を需めんとと源左衛門幸ひありと悦び日吉丸を順光坊の下僕とあし東國へこそ下したる然る日吉丸旅中宿々泊くゝて萬の事其取廻しいと賢く物馴し發明に順光坊大ひに喜びよき從僕を得たりとて日々怠たらず廻る程又終り遠州濱名よ着し松下嘉平治之綱が家に宿す此之綱の武術兵學の奥儀を悟り今川義元の旗本ありて千五貫を領し今川一家の武道の師て用ひ重く其名頗る隣國にお高し之綱順光坊が召連たる僕を觀る其相貌甚だ奇おして面ハ猿の如く眼中ハ重瞳あり近く招きて物語をさすに言語分明として其勇至つて大ひあり松下奇童ありとて甚だ怪し順光坊お乞て下僕とす順光坊元より備ひたる人ありけれハ否む事なく日吉丸を松下が家に止め中村に行て其よしを告べしとて之綱小暇を乞ひ別れて濱名と去えけり楯も今川の諸士日々松下が家お來り盡の槍術劍術の稽古其外弓鉄砲の日を暮し夜ハ軍學兵書を讀じ一日

一夜の閑隙おし日吉丸嬉しき事に思ひ少の暇もあれ彼稽古を觀察し心の内お習練し夜ハ襖を隔て、兵書を聞き悉くこれ骨を記し一を聞て方を察し頗る武術兵學の趣旨その大概を記憶せり爰に初めて足止め年積りて十八歳天文廿二年の春首服して中村藤吉郎高吉と名乗り慢りあく勤仕しけり

○中村藤吉郎川島宇市と劍法を試む

松下が弟子の中に川島宇市といへる血氣の壯者あり力量衆に超え刃刀の術に慢じ松下門下の隨一なりと自負し人を見ると芥の如く同門の壯士悉く是と憎む或日中村藤吉郎例の如く稽古場に至り試合の勝負を見る彼川島宇市藤吉郎に向ひ汝青男の身分として毎度我々が稽古を見物そ我師家の下僕おれハ定めて少の嗜とあるべし汝が稽古の爲おまハ我合手とありて一太刀試み得さすべしと詰り進むきとも藤吉郎かゝく辭退し試合の期又臨み容謝ありがたきものにハハ自然某氏勝を取ひてハ氣の毒ありと

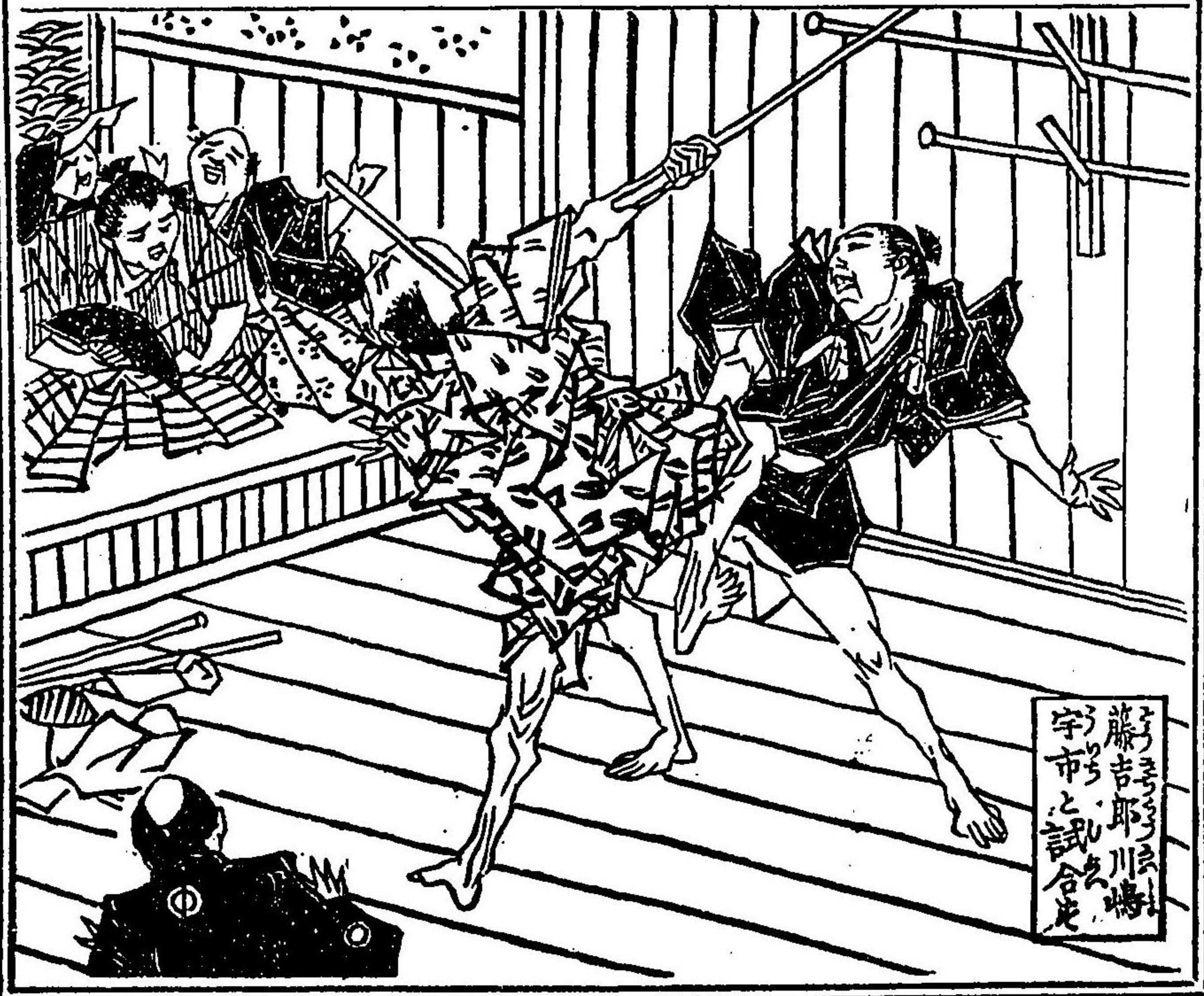
逃出るを宇市引とめて大に怒り汝ごとく小冠者何ぞ我を打負さん奇怪の大言武士の面立がたし早く来りて勝負を決せよと木刀構へ坐に直れば藤吉今の詮方なく同じく木刀ひつ提て稽古場立並べバ數多の門人息とつめこの面白き試合なりと拳を握り見物す宇市の藤吉の小冠者只一打に打殺せしと木刀を大人相に構へ微塵にちれと打てかゝるを右へ代し左へ外し付入て宇市が左の眼の上をハツンと打バ宇市眼くらんで太刀筋みへす萎む所と太刀打落し勝負いかおと聲掛れバ並居る門人一同お仕たりくと譽にけり宇市の面目を失ひ無念ながらも席を立て隠きて歸宅したりける松下嘉平治此事を聞き大ひお悦び藤吉と召て其修行を尋ねるに藤吉答て某氏曾て武術を學びたる事なし當家に至り諸門弟の稽古を熟察し密に心中に之と練り晝夜忘るゝ時あし人に對して打合たるの今日こそ初まりと申しければ松下殆んど感入り汝が相貌尋常ならず後果して出身すべし今日より武術兵書の大義

を以て盡やく汝も敵へ我が腹心となすべしと是より門人と同席にて萬の稽古怠りなく切磋琢磨の功を積み藍より出て藍よりも猶青く其行末を頼もしき

○中村藤吉郎初陣高名

弘治三年の春北條氏政氏直父子大軍を卒し駿州へ亂入し富士川にて今川義元と合戦ふ北條の勇將伊藤日向守五千餘騎川を渡して今川の先陣朝比奈備中守といども戦ふ朝比奈備中守三千餘人四手に分ち歩立の兵五百騎悉く長柄の鎧を持って伊藤勢の川を渡して進み来るを突死せらます伊藤日向守下知を傳へて騎馬の武者一千人どつと喚てのけ出鯨波を作つて戦ひければ朝比奈が歩行者散々に成て逃たりけり伊藤勢のますまじと追所に堤の左右より朝比奈が伏兵一千餘騎伊藤が勢の中を断切鳥銃を雨の如くに打出し喚ら叫んで戦ひければ伊藤方は討るゝ者數をえらす四道路も成て敗走を日向守の手合せの戦ひに敵の計ごとよ的り味方敗北するを見て口惜き事と思ひいら

つて士卒を罵ると雖も敗軍の習ひあて返し合す兵もさく力及ばず殿りして退死けるが多勢一同に河を渡り溺死せんも拙しと一町許川下に至り士卒等に瀕ふとさせ堤の上を馬を立て叩へたり爰も松下嘉平治之綱も義元の召も應じ旗本を堅めけるが出陣の時木下藤吉郎手勢お加り戦ひも趣かん事を希といへども嘉平治之綱是をゆるさず藤吉郎力なくされバとて家お止つて主人の生死さへ不知も本意おしと知音の方にて具足一傾かり出し隠れて戰場に至り合戦を見物して居たりけるが今日の我初陣なれば好さ首どりて高名せんと其處爰よと窺ひよ伊藤日向守只一人堤に馬を立て味方の引をさがめ居れり藤吉郎これを見てよき敵ごさんあれと一巻に馳來り日向守が乗たりける馬の大腹をまたゝかゝ突通せば馬の驚き跳ねがる日向守も堪り得ず大地へどうと落さるりける藤吉郎透さず走り寄附付て鎧の透間を二刀さし押へて首を討落し本陣さして歸りける伊藤が士卒是をみてわれよくと涸れとも川



中の事なきに急に堤へ上りがたく敵は引取ればすべし方なく此旨氏政へ注進す藤吉郎の伊藤が首を提げ松下に達て事の次第を物語れば之綱大さき驚き馳て其首を以て大將義元お披露す義元藤吉郎を近く召よせ直の褒詞を賜ひければ陪臣の面目ありと勇で席を退きけり扱北條方への初度の合戦を仕損じ先取の恥辱を雪んと大道寺駿河守七千餘騎にて川を渡す今川方への飯尾豊前守朝比奈に替つて備へを立兩陣鉄炮を打かけ鎗と合せて攻取ふ愛お伊藤日向守が甥伊藤彌作といへる大剛の勇士あり叔父が討死を無念お思ひ弔ひ合戦の敵の大將を討取んと只一人今川の本陣へ切入り松平治之綱かくと見るより馬を飛して馳來り鎗を燃て突かゝるを彌作の實藏院の鎗鎗を手練したれば松下と鎗を合せ半時計り戦ひけるが松下鎗の袖を鎗鎗に引かたりられ既に馬より落んとす藤吉走りよつて鎗の柄の中より丁と切はるせ伊藤の馬よりとふと落る之綱得たりと鎗をのべて突とめ馬より飛下り

押へて首を取たりける此時既小日光西山へ傾き兩陣互ひに鎗と鳴いて軍をおさめ鎗を焚て對陣を其夜武田信玄より山本勘助山形三郎兵衛の兩將に命じ北條今川の和順を取結ふ兩家武田の武威に服し異儀なく和談調以軍を治めて歸城しける

○藤吉郎尾州に趣き鎗を備とす

太公望が妻の覆水盆に納らすの譬も悲ぢ朱買臣が妻の米錢の恵みを得て悔く絶る是婦人常の情あり宜あり匹夫匹婦いかにぞ大丈夫の志しし置り知らん扱も松下之綱の富士川の合戦に藤吉郎比類なき働きを成しければいよく重く用ひたる之綱元來藤吉が大志あるをよく知れば去て他家お仕へん事を恐れ同じ家人に川村治右衛門が娘さく女といへるを藤吉お娶せ永く己が家お止めんとす彼はく生質お備極藤吉がかたち醜さを嫌へとも主命もだし難く終ふ夫婦と成りたれと誓々として樂ます或時嘉平治藤吉を召て今尾州織田信長が家お補側あるらざる嗣丸として



右の脇めて合せ伸縮自由ある鎗を用ゆるよし汝が古郷ふれに織田家より此鎗を調へ來るべしと黄金六兩を出し鎗の料よめて與ふ藤吉委細領承し退いて妻お別れを告る此妻よ死折なりと思ひされ一先離別せん事を希ふ藤吉も其詞に隨ひ離縁の一紙を認め尙別れの驗として先年秋葉權現の神前よて拾ひ得し三面の大黒天を取出し妻に與へて云く抑々此尊像の弘法大師の御作よて之を信仰する者の必ず三千人の司と成よし申し傳ふ汝信仰して後の榮を祈るべしと云ければ妻打笑ひさある靈驗わらたある尊像の和主信心して立身をも祈給ふべし妻の女身なり望みしと云藤吉やがて大黒天を手お取り上我望ひかゝる小事にあらす是を所持して更お用なしと傍ある石お打付れば不思議なるかき此尊像一塊の灰を扱たるごとく微塵に成て飛散たり此人天下と掌握すべき祥瑞ありと後よぞ思ひ合せたり

○修行者 藤吉郎を考相す

漢の高祖三尺の剣と掲げ世湯山白蛇と斬つ漢家四百年の基業を起し給ひ一も其始めの酒上の亭の長たりしより興れり若き時色を好み業にすさみ人おしあへて之を煉む中に單父の呂文一人沛公を相して甚だ尊み其女呂顔を與へて沛公を娶後此女を呂后と稱し呂文を呂太公と号す依て思ふに天智天皇に乞食の相ましく明雲座主お歿死の相有しもまかるべき所聞あるべし藤吉郎松下か下知によつて尾張國へ趣くとて矢矧の橋の茶店にて暫く休息したりたるが遠近の旅人老若男女打まじり休ひたる中お修行者藤人藤吉をつくとくと打守り傍らへ招き其相貌を熟察し大きに驚きすけるは足下の相奇あり妙あり必ず天下を主たるべし然りとすへども目前視る所賤しき匹夫下郎なり今戰國の時よりめて淺井朝倉今川佐々木齋藤北條武田上杉をはじめ諸國の勇將威を震ひ權を争ひ天下を平吞せんとする其中お匹夫の足下に斯る貴き相有ころ不思議され我年来和漢の相書お眼を晒し修一得たりし相法も今

日はじめて疑ひを起せり藤吉郎大ひに笑ひ我今こそかく賤しき身あれどもいかなる僥倖有て立身すまじきものもあらず今の詞後に應せバ其時厚く賞すべしと云すて、別れける此修行者秀吉天下統一統の時安國寺の惠慶和尚とて十万石を下し賜り天下の新禱所と成りけるハ此者相の所請なりたる

○信長高祖

法程は藤吉郎の古郷中村に歸り父母一族を集め松下より鏡の料として預りし黄金を別與へ我松下に仕るといへども小器の之綱我出身の便り惡一父が古主織田信長仁勇の大將おられ織田は仕へて驥足と伸べしとて其時を見合せけり抑々尾州清須の城主織田上総介信長卿の家系を尋るに桓武天皇の末葉よりて平相國清盛の嫡孫三位中將平資盛十九代の後胤尾州の大守斯波武衛家の臣下ありしが去ぬる應仁の亂より斯波家大ひお衰へ信長の父信秀の時お至つて斯波の一家滅亡し終お尾州一國悉く織田は屬し

ぬ時お天文三年の頃織田信秀一男子を生じ童名を吉法師と号し生得聰明伶俐にして信秀の寵愛大方ならず天文十五年十三歳にて元服し織田三郎信長と号す十六年信長十歳ありて二千餘騎を率し今川義元と討んと參州へ出馬し吉良大濱の邊を相働く是信長卿の初陣ありは乳母平手中務政秀士卒に下知して在々所々お放火せしめ敵出て戦ひ力戦して信長卿の高名に備へんと野陣を擡へて敵を待ども三河勢一人も出で戦ひず爰おひて中務信長を進めて陣をばらひ本城へ歸らんと信長此時十四歳いまだ幼年ありといへども其將の器備り給ひけれバ平手が軍配と用ひず此所お陣をかため二千餘騎を七手お別ち備へて立て扣へける參河勢の敵さまへ放火亂妨をさせども敢て出る事なく却て敵の退くべき道お埋伏して其不意と討んとすされども信長勢野陣と取て滞留しなれば兼ての計策相違してさらバ今宵夜討すべしとて其勢一千五百人子の刻過る頃信長の陣へ押寄陣と作つて切人たり信長勢兼て

賜したる事おれば相圖の鉄炮を鳴すと等しく七手の軍兵二千餘人參河勢を中に取込引包んで戦ふにぞ今川方案も違ひさんへ亂れて討るゝ者數をえらす四角八方へ逃散たり信長急に令を傳へすいや今こそ引取べしとまた夜の明ざる程に陣拂ひして名古屋の城へ歸り給ふ此合戦の次第悉く圖おわたり進退掛引天晴大將軍の器量備り給ふを見て平手中務をばじめもろくの軍士兵卒も致るまで未たのもしく悦びける然るは天文十八年三月三日織田備後守信秀卒去ありて信長家督相續し給ひけるが信秀病床に臥し給ふ頃おひより信長卿何となく物狂いしく外見にかゝわらず衣服より髪のかたちまで異相と好まざし馬お上りて葉かんとを喰ひつゝ往來し傍若無人の行跡のみ多ありけれバ家中の人々安からず思ひかくて織田の家も滅亡しぬべしとて種々諫言すと雖も信長更に用ひ給ひすいよく我意を募られけるを歎かぬ者おあかりなり

○信長千僧供養

或時信長領地四方の出口へに關を居へ守りの役人を數多備へ往來の僧法師を悉く捕へしむ此事又例の物狂ひありと平手中務殊に歎き晝夜涼なく諫言しけれバ信長甚だ迷惑し席を避て平手に對面せず猶も下知を傳へて僧法師を捕へける程に既ち三百人餘りける彼往來の僧共のいかかる事ありてかく大勢の僧を捕へ置るゝ事よやと銘々喧ひそしく語り置れども誰もつて信長卿の趣意を知らたる者も亦く狂人同前の國主されバ定めて斷ち我々を殺し慰み成し給ふあんめりとして聲をあげて泣もあり年老たる僧どもも前世の報ひ過去の因果佛の教導此時ありと經を讀み佛名を唱へ騒しき事云計なし時お同四月下旬信秀卿の尽七日は當り方松寺まで追福の法事執行するべしとして彼捕へ置たる僧法師を不殘よび出へ方松寺へ伴ひ信長僧衆と對面し今日亡父中陰の満忌に當りたれば千僧供養を爲んため兼日より留置さる銘々宗旨へに隨ひ宜しく讀經供養たのみ入よし叮嚀を盡し告まへバ數多の僧

ども始めの後を保んじ喜び勇み諸々の經共を誦讀し佛事作善畢りけれバ更に重業の齋を調へ僧法師を供養し若干の金子と與へ布施ををし各々暇を給りけれバいかなる愛目にか達んずらんと歎き悲みし衆僧も籠中の鳥の雲井よかけの心地して已がさまへ出行ける家中の諸士も案お違ひし信長の行跡兎にも角も異風を好み給ふ長久の計とて非ずとて人々眉を擡めけり

○平手政秀諫死

扱も信長卿の行跡正しからざるふより平手中務政秀屢々諫言と勸むれども曾て用ひ給らず平手退ひて思惟するに我信長卿の乳母として幼おくまします時より晝夜御傍を去らず守立まいらせたりしよかく異風を好み給ひ御心揃ひせ給はずして今新に家督を意せ給ひ若何して國家を保ち持給はんや況や今四方悉く敵國おして互お透を伺ひ奪んんと計る秋あり自然當家滅亡に及び國陷るの時よ至らば何の面目か有て死して先君に謁し奉つるべき所詮

多かりけれバ宮々次第お誕生ありて十六人までを座ましける中にも第一宮尊良親王の御子左大臣言爲世卿の女贈從三位爲子の御腹おて座へを吉田内大臣定房公養君おし奉つりしかバ志學童の始より六義の道も長じさせ給へりされバ富緒河の清と流れを汲溪香山の故き跡を踏で嘯風弄月おは心を傷め給ふ第二宮も同じ御腹おて座へる細角の御時より妙法院の門跡お入室ありて釋氏の教へを受させ給ふ是も瑜伽三密の間に歌道數寄の修辭おび有しかバ高祖大師の舊業にも耻す慈鎮和尚の風雅も越たり第三の宮の民部卿三位殿の御腹なりは幼稚の時より利根聰明おは座せしかバ君は位をバ此宮に社と思食たりしかども治世の大覺寺殿と持明院殿と代々持せ給ふべしと後睦院の御時より定められしかバ今度の東宮とバ持明院殿の御方よ立進らせらる天下の事大小もなく關東の計らひとして敵慮も任せられざりしかバ元服の義を改められ梨木の門跡にお入室ありて承統親王

の門弟と成せ給ひて一を聞て十を悟るは器量世に又類も無りしかバ一寶圓順の花勾ひを荆溪の風に薫じ三諦即是の月の光りを玉泉の流れに浸せりされバ消なんとする法燈を挑げ絶えんとする慧命を繼んこと只此門主の時あるべしと一山學を合せて悦び九院首を傾けて仰ぎ奉つる第四の宮も同じ御腹おて座しける是ハ聖護院二品親王の御付弟にて座せしかバ法水を三井の流れお汲み詣新と慈尊の曉きに期し給ふ此外儲君儲王の選バ竹苑椒庭の備へ誠は王業再興の運福祚長久の基ひ時を得たりとぞ見へたりける

○中宮の産後祈りの事 付後基偽つて籠居の事

元亨二年の春頃より中宮懷妊の祈りとして諸寺諸山の貴僧を仰せて様々の大法秘法を行はせらる中にも法勝寺の圓觀上人小野文觀僧正二人の別勅を承て金闕壇を構へ玉體お近づき奉りて肝膽を碎ひて祈られける佛眼金輪五境の法一字五反孔雀經七佛藥師熾盛光鳥羽沙摩變

成男子の法五大虚空藏六観音六字阿闍利帝母八字文殊  
 普賢延命金剛童子の法護摩の煙の内苑に滿振鈴の聲の掖  
 殿を響ひて何なる悪魔怨靈ありとも障穢を成難しとぞ見  
 へたりける加藤功を積日を累ねては所りの精誠を盡さ  
 せけとも三年まで曾ては産の事無りけり後に子細  
 を尋ねれり關東調伏の爲事と中宮の産を寄て加藤に  
 秘法を修せられけるとあり是程の重事を思食立事されば  
 諸臣の異見とも窺ひ度思召けれども事多聞及ば武家  
 に漏れ聞る事や有んと懼り思召せける間深慮智化の老臣  
 近侍の人々も仰せ合せらるゝ事もなし只日野中納言實  
 朝藏人右少辨俊基四條中納言隆實尹大納言師賢平宰相成  
 輔計りみ潜かに仰合せられてさりぬべき兵と召れけるも  
 錦織の判官代足助次郎重成南都北嶺の衆徒少々勅定ふ  
 應じてけり彼俊基の累業を繼で才學優長成しかば  
 顯職も召仕りて官園臺ふ至り職を司とれり然る間  
 出仕事繁くして籌策も隙なかりければ何よもして暫く籠

居して謀反の計畧を回さんと思ひける處山門横川の衆  
 徒狀と捧げて禁庭お訴ふる事有り俊基彼奏狀を披て讀  
 申されけるが讀誤りたる體にて櫻殿院を櫻殿院とぞ讀た  
 りける座中の諸卿是を聞て目を合せて相の字を一篇に付  
 ても作に付てももくこと讀べかりりと掌を拍て笑  
 入れける俊基大ひに耻たる氣色にて面を赤らめて退出す  
 夫より耻辱に逢ひ籠居すと披露して半年許り出仕を止山  
 伏の形お身を易て大和河内お行て城廓に成ぬべき處々を  
 見置東國西國も下て國の風俗人の分限をぞ窺ひ見れける  
 ○無禮講の事 付支懸文談の事  
 爰に美濃國の住人士岐伯嗜十郎頼貞多治見四郎次郎國長  
 といふ者あり共清和源氏の後胤として武勇の聞へあり  
 ければ實朝卿様々の縁を尋ねて昵ひ近かれ朋友の交り己  
 ゝ淺からざりけれども是程の一大事を左右きく知せん事  
 如何に有べからんと思ひければ猶も能々其心を窺ひ見  
 ん爲に無禮講といふ事をぞ始められける其人數ふり尹大

納言師賢四條中納言隆實洞院左衛門督實世藏人右少辨俊  
 基伊達三位房游雅聖護院廳の法眼玄墓足助次郎重成多治  
 見四郎次郎國長等あり其交會遊宴の體見聞耳目を驚かせ  
 り献盃の次第上下を云す男の烏帽子を脱て髪を放ち法師  
 の衣と着すして白衣にあり年十七八ある女の形形ち優よ  
 膚へ殊に清らかあるを二十餘人編の單へ計りを若て酌を  
 取せければ雪の膚へ透通りて大掖の芙蓉新に水と出さる  
 に異ならず山海の珍物を盡し旨酒泉の如く浸へて遊び  
 戦れ舞歌ふ其間より只東夷を滅すべき企ての外他事なし  
 其事とく常に會合せば人の思ひ召むる事もや有んとて  
 事を文談に寄んが爲に其頃才登無双の聞へありける玄慧  
 法印といふ文者を請じて昌黎文集の談義をぞ行いせける  
 彼法印謀叛の企てといふ夢も知す會合の日毎に席に臨ん  
 て玄と談し理を折く彼文集の中昌黎赴潮洲といふ長  
 篇あり此處お至りて談義を聞人々は皆不吉の書ありなり  
 孫子吳子六韜三略おんと社然るべき當用の文おれとて昌



黎文集の談義を止てけり此韓昌黎と申せの晩唐の季又出  
て文才優長の人ありけり詩の杜子美李太白又肩を雙べ文  
章の漢魏晋宋の間傑出せり昌黎が猶子韓湘といふ者あ  
り是れ文字とも嗜まず詩篇も携りらず只道士の術を學  
んで無爲を業とし無事と事とす或時昌黎韓湘に向つて  
申しけるの汝天地の中に化生して仁義の外に逍遙す是君  
子の耻る處小人の専らとする處なり我情に汝が爲す是を  
悲しむ事切かりと教訓しけれバ韓湘大ひに冷笑く仁義の  
大道の撥れたる處又出學教の大偽の起る時に盛なり吾無  
爲の境に優遊して是非の外に自得すされバ眞宰の臂を製  
て壺中天地を藏し造化の工を奪ふて橋裏に山川の時つ  
却つて悲しむらくバ公の只古人の糟粕を甘て空しく一生  
を區々の中に誤る事と答へけれバ昌黎重ねて曰く汝か  
言ところ我未だ信せず今前も造化の工を奪事を得てんや  
と問ふ韓湘答る事無しと前も置たる珊瑚の盆を打擲て  
馳て又引仰向たるを見れば忽ち碧玉の牡丹の花の媚媚た

る一枝あり昌黎驚いく是を見に花中よ金字に書る一聯  
の句あり  
雲横秦嶺家何在 雪擁藍關馬不前 云々  
昌黎不思議の思ひを成て是を讀一唱三嘆するよ句の優美  
遠長なる體製のみ有く其趣向落着の所を知り難し手に取  
く是を見んとすれバ忽然と消失ぬ是よりして韓湘の仙術  
の道を得たりとい天下の人又知れたり其後昌黎佛法を破  
つて儒教を貴むべき由奏狀を奉ける答お依て潮州へ流さ  
る日暮馬泥んで前途程遠し遙かに故郷の方と願されバ秦  
嶺の雲横つて來らん方も覺へず悼んで萬仞の嶮又登ん  
とすれバ藍關に雪滿て行べき末の路も無し進退歩と失奇  
つて頭を回す處お何れより來る共かく韓湘勃然として  
傍におわり昌黎悦んで馬より下り韓湘が袖を引て泪の  
中に申しけるの先年碧玉の花の中お見たりし一聯の句ハ  
汝我お豫しめ左遷の愁へを告知せるなり今又汝爰に來れ  
り料り知ぬ我遂に謫居お愁死して歸る事を得じと再會期

無して遠別今にあり豈悲しみに堪んやとて前の一聯又句  
を續て八句一首と成して韓湘お與ふ

一封朝奏九重天 夕貶潮陽路八千  
欲爲聖明除弊事 肯將衰朽惜殘年  
雲橫秦嶺家何在 雪擁藍關馬不前  
知汝遠來須有意 好收吾骨瘴江邊

韓湘此詩を袖に入れて泣々東西又別よけり誠ある哉癡人の  
面前よ夢を説すと云ふ事を此談義を聞る人々の思思ひけ  
るこそ愚るれ

○頼貞回忠の事

謀叛人の興黨土岐左近藏人頼貞の六波羅の奉行齋藤太良  
左衛門尉利行が女と嫁して最愛したりけるが世の中己よ  
亂れて合戦出來りなバ千ふ一も討死せずと云聖有まじと  
思ひける間兼て餘波や惜りけん或夜の寐覺の物語よ一  
樹の蔭に宿り同し流を汲も皆是多生の縁淺からず况んや  
相馴奉りて已よ三年又餘れり等閑からぬ志の程をい氣色

に付け折し觸ても思ひ知給らん去とも定めなき人  
間の習ひ相逢中の契りあまバ今若我身墓お成ぬと聞給  
ふ事有バ無らん跡までも貞女の心を失ひて我後世と問給  
へ人間は歸らぬ再び夫婦の契りを結び淨土に生れバ同し  
蓮の臺に半座を分て待べしと其事とあるかき口説泪を流  
してぞ申しける女つくくくと聞て怪や何事の侍るぞや明  
日までも契の程も知らぬ世に後世までの荒増の忘んどて  
の情にてこそ侍らめさらでん懸るべしとも覺へずと泣恨  
みて問けれバ男の心淺くしてされバとよ我不慮の勅命と  
傳まつて君に憑奉つる間辭をるに道なくしては謀叛よ與  
しぬる間干に一も命の生んずる事難し端なく存る程に近  
く別れの悲しさに兼て加様に申さきり此事穴賢人に知さ  
せ給ふかと能く口をぞ堅めける彼女姓心の賢き者されバ  
夙よ起て熟々と此事を思ふお君の謀叛事ならずの憑と  
たる男忍ちに誅せらるべし若又武家亡びお我親類誰か  
の一人も殘るべきさらば是を父利行お語て左近藏人を回



忠の者もあし是をも助々親類をも扶けやと思ひて急ぎ  
 父か許し行き忍びやかみ此事を有の儘に語りける齊藤  
 大ひに驚き馳せ左近藏人を呼寄斯る不思議を承ける誠  
 ていやらん今の世に加様の事思ひ企て給へ偏に石を抱  
 て淵み入者にていべし若他人の口より漏るべ我等も至る  
 迄み奇誅せらるべきおていへハ利行急ぎ此邊の告知せら  
 る由を六波羅に申して共其咎を遁れと思ふ何ぞ計ひ  
 給ひぬぞと問ければ是程の一大事を女姓不知する程の心  
 にておしかり仰天せざるべき此事の同名頼貞多治見四郎  
 次郎が勸め依て同意仕つりい只兎も角も身の咎を助る様  
 に計ひいへとぞ申しける夜未だ明ざるお齊藤急ぎ六波  
 羅へ参りて事の子細を委しく告げれば則ち時を回さず鎌  
 倉へ早馬を立て京中洛外の武士共を六波羅へ召集めて先  
 著到をぞ付られける其頃攝津國葛葉と云處に地下人代官  
 を背きて合戦及ぶ事あり彼本所の雜掌と六波羅の沙汰  
 として庄家に鎮ん爲に四十八ヶ所の符并びに在京人を催

ふさる、由を披露せらる是ハ謀叛の輩を落さぬ爲の謀略  
 あり土岐も多治見も吾身の上と、思ひも寄す明日の葛葉  
 へ向ふべき用意して皆己が宿所に居たりける去程、明  
 れハ元徳元年九月十九日の卯刻に軍勢雲霞の如くに六波  
 羅へ馳参る小串三郎左衛門尉範行山本九郎時綱は紋の旗  
 を賜り打手の大將を承りて六條河原へ打出三千餘騎  
 を二手に分て多治見が宿所錦小路高倉土岐十郎が宿所三  
 條堀河へ寄けるが時綱斯てハ奴何様大事の敵を討漏しぬ  
 と思ひけるにや大勢をバ態と三條河原小留れて時綱只一  
 騎中間二人ハ長刀持せて忍びやかみ土岐が宿所へ馳て行  
 き門前に馬とバ乗捨て小門より内へト入て中門の方を  
 見れば宿直しける者よと覺へて物具太刀刀を枕に取散し  
 高野さつきて寐入たり庭の後を回つて何よか匿地の有か  
 と見れば後の皆築地ふて門より外へ路もあしさてハ心安  
 しと思ひて客殿の奥なる二間を窺と引明たれば土岐十郎  
 只今起上りたりと覺へて鬘髪を揺揚て結けるが山本九郎

九條大相國信長公の外先蹤おし大將あわれねども兵杖と  
 賜りて隨身を召具して執政の人の如し轡車に乗て宮中を  
 出入す偏へハ女御入内の儀式なり太政大臣の訓導の禮重  
 く儀刑の寄深ければ地勢大ありといへども賢慮足されハ  
 其仁に當る事あり天才高しといへども政理明らざれば  
 其器あわれず其人ハ非ずして跋へさ官あわれざれども一  
 天の安危身ハ由萬機の理乱掌にたりたれば子細に及ず  
 一門の親族大國を賜り一品の階級まで九代の先蹤を越奢  
 修日に増榮花月に燦んありけるお清盛仁安三年十一月十  
 一日齡五十一にして重病に侵され存命の爲ハ剃髮と法名  
 を靜海と名のる其駿や宿病立所ハ平愈して天命を至  
 ふす威勢に惶れて世の人從ひ付事風の本草と藤がごとく  
 雨の山野を潤す異あらずされハ六波羅の親族公達とい  
 へハ花族も英才も面を向へ肩を双ぶる人あかりけり  
 ○清盛三百人の禿童を侍す  
 太政入道清盛の命として十四五才若ハ十六七計ある禿の

髪を首の廻に切つ、三百人召仕れけり童にもあらず法師  
 にも非ず一様お長絹の直垂を着る時ハ袴の布袴を着せ又  
 一色に結物の直垂を着時ハ赤袴を着させ梅の楯の三尺  
 計なるを手もと白く汰て右に持鳥を一羽ツ、鈴付の羽ハ  
 赤符を付て左の手にすへさせて面々に持せて日毎ハ遊行  
 さしむ是ハ靈鳥頭のみさき者として大會宴の珠童を異似れ  
 たり又ハ耳聞也これハ若靜海があたりハ意趣あらハ忽緒  
 ハ云者あるべし其者を聞出してやし上ハ相糺さんどの仰  
 されハ京中の條里小路門々戸々に耳を時聞すまして訴々  
 れハ咎あさき者も多く損じけれ入道殿の禿とさへハ馬  
 牛與車あとも道を開て通へたる適路次に往遇ハ輩ハ  
 御幸行啓に参り會たる様に手をつき腰をかきりく走除て  
 ぞ過行ける此禿等がすす事ハ善惡ハ糺さず入道許容し給  
 ひけれハ貴賤共追従して善も惡も平家の事ハ云す又禿ハ  
 惡しと思ひれたるものハ入道殿に讒せられて科あぐりて  
 多く損する者も有けり又禿一人にても閑たる時ハ入立て

三百人を極らる、梅の傍鳥の持やういか櫛にも深と思慮  
ある事よやとぞ私語ける昔唐に入葉大臣とて天下に聞  
ゆる賢臣にて罪を輕し賞を重く民を憐事堯舜の政化に  
異ならず此如く禿童を多く揃て金蹄鳥といふ禽を持せて  
國々巷々に徘徊させく萬民の愁歎を天聽に奏せよ直に善  
政を行へんと有れば禿を殘す者も亦く恨を合者もなし  
國豊み民悦んで政徳海内に及ぼしけりされば是を善者  
の童と名付たり今の童の事お觸れて物の煩ひ多ければ悪  
者の童といひつべし漢家本朝上古末代善惡の變れども權  
威の劣らず入道福原おありしける時賀茂大明神禿お現し  
く三百人又打紛れて近習ありけり何き今の童やらん本の  
禿やらん恐しふりし事共あり

○詔して二代皇后よ立つ

清盛の娘八人おのけるが皆とろくく幸し給ひけり一  
の櫻町中納言成範卿へ相具し後より御兄花山院左大臣お  
進せられけり此成範卿の故少納言入道信西の三男あり優

に風流ある人にて櫻と愛し給へり館の四方に吉野山の櫻  
を多取寄て植させ其中小室と造て住給ひけれ櫻町とす  
けり春色に乘り櫻の散名殘り惜又來る春と待詔玉ひしか  
バ異名お櫻待中納言とも呼けり特お執し思さける櫻おれ  
バ七日に咲散花を敷て花の命を惜て泰山府君を祀られ其  
上天照大神を祈らせ給へバ三七日の齡を延たりけるぞ  
不思議なれされバ斯を思ひつけ給ふ

千早振わら人神の神なれば花もよりひを延よける哉  
太神の靈瑞新よして奇特あるふて帝も御感有て勅書よ櫻  
町中納言とぞ仰ける二の徳子と号く后お立玉ふて皇子降  
誕あり後より建禮門院とやしき三の六條攝政基實公の北  
政所なりこれの世に勝れて琵琶の上手おてありける四の  
冷泉大納言隆房卿の北方にて琴の上手とぞ聞へし五の近  
衛殿下基通公の北政所おて御容嚴くして水精の玉を薄衣  
よ裏たる様おて御衣を透通りて見へければ父相國も衣  
通姫とぞ呼れける特より和哥の上手にて名哥多く詠給へ

大臣淡海公の十二代を駿河守維景と號と任國駿州より故  
わりて伊豆國に立越狩野に任す其子維藤伊豫守頼義朝臣  
よ仕へしより以來數代源家の恩顧を受く其子狩野九郎維  
繼其子四郎大夫家繼(後入道して寂蓮禪門と云)久須美庄  
(伊東宇佐美河津の三ヶ所を都て久須美の庄と號す)と  
領して伊豆第一の大家たり始め佐藤七郎重高が女に相馴  
て三人の男子を儲く嫡男を祐家と號し次男を光家といふ  
(加賀國の住人林介貞光か養子とあり後林四郎と云)  
三男を茂光と云(父の狩野と譲りて後狩野介と云)右の  
三子と産て妻女世を早ふしける時お同國の住人大見平三  
家政が女玉江下野の國の住人八田八郎宗基よ嫁して一女  
を儲けて名を氷草といふ夫八郎早世しけるにより娘を連  
て父の家に歸り居けるが容顏美麗の聞へあるを以て家繼  
頼りに慕しく思ひ父近江よ乞ふ家繼の大家の事おれば家  
政大ひに悦び早速承がひ女玉江よ再嫁を勸む玉江否ひと  
雖も再三の諫め黙し難ければ娘の氷草を連て家繼か方へ



再嫁しけるお程かく異病發して終に死す家繼大ひ又歎き  
 悲しみたるが去もの日々は疎く繼娘氷草が容色世み類ひ  
 るさみ心迷ひ密に通じて一人の男子を儲け名けて乙石丸  
 と號す其より氷草頻り悪心を生じ何とぞ乙石を以て伊  
 東が家督となさんと晝夜奸計を施し終に嫡子祐家と毒殺  
 して失ひける家繼此巧みを知す氷草が愛に溺れて乙石家  
 嫡として祐繼と改め又嫡男祐家が一子有けるに河津の庄  
 を與へて河津次郎祐親と號し其身の入道して寂蓮禪門と  
 いふ狩野介茂光父入道か所爲一ツとして我意に叶ひされ  
 ば折々父を諫ると雖も寂蓮之と用ひされば父子の間互ひ  
 お隔て大方の不快の如くにして居たりけるされば祐親の  
 父を問々氷草が爲よ殺さる其上所領財寶ごとく奪ひ  
 れ僅り河津一ヶ所を得て無念の至りありと憤りを含みさ  
 から年月を送りける然るに祐繼家督とあり父母を送りて  
 後三人の男子を儲く嫡子を兼石(後工藤左衛門祐經と云)  
 次男を普石(後宇佐美三郎と云)三男を駒法師(後伊豆

次郎と云)時久壽二年の秋源の爲義の次男帯力先生義  
 賢聊か遠勅の科によつて謀伐を加ふべしと兄下野守義  
 朝命を蒙り息男源太義平へ下知し給ふ義平未だ弱年なり  
 しがとも力早業世お起へ心賢しくお座しけれの急ぎ近國  
 の勢を催ふし同く八月十六日伯父義賢が住所武藏國大藏  
 の館お押寄彼館を取囲み喚き叫んで攻立る義賢の郎等と  
 も思ひ寄ざる事あれども流石物馴れたる兵共あれの堀の  
 上より走り上り矢先を揃へ散々お射ける寄手は是を事とも  
 せず兜の鏝と傾け射向の袖を露し手負討るも顧りみず  
 乘越越攻立る大將義賢士卒下知し給ひける寄手の  
 大將の我甥鎌倉の源太義平軍勢の伊豆相模又の當國の者  
 どもと忍ゆ然れば汝等が此年頃肩を双べ膝を組て親しく  
 交りし者どもおらずや一足も退ぞさて敵お笑る事勿と  
 華かに討死して名を後代に留めよやと下知し給ふ逸雄の  
 若者ども勇み進んで門を闢き打て出切先と揃へ喚ひて蒐  
 る寄手の軍勢向かい少もためらふべし相蒐り蒐りて